

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520841

研究課題名(和文) スペイン内戦と女性亡命者 - フランスへの亡命者を中心に

研究課題名(英文) The Spanish Civil War and Women in Exile: Spanish Women in France

研究代表者

砂山 充子 (Sunayama, Mitsuko)

専修大学・経済学部・教授

研究者番号：00307125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、スペイン内戦後、亡命を余儀なくされた女性たちのうち、フランスへの亡命者たちがどのような人生を送ったのかを明らかにすることであった。第二次大戦勃発後のフランスで抵抗運動を続け、ナチの女性収容所ラーフェンスブリュックに収容された女性たちについて、先行研究に依拠し、さらに様々な資料にあたりながら、収容者リストを再検討し、あらたなるリストを作成した。ラーフェンスブリュックから生還したネウス・カタラーについてその生涯を追い、同収容所にいたフランス人の人類学者ジェルメーヌ・ティヨンとの比較検討も行った。亡命先の女性組織の活動についても考察をしたが、まだ十分な成果は得られていない。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I tried to investigate how the Spanish women, who were forced into exile after the defeat in the Spanish Civil War, spent the years that followed the conflict. The main focus was put especially on those who went to France. After the occupation of France by the Nazi, many Spaniards were captured and taken into Nazi concentration camps. I revised the list of the Spanish women inmates of the Ravensbruck concentration camp, which was a women's camp situated in Northern Germany. I also did a comparative study on the lives and thoughts of the two survivors of the Ravensbruck camp: a Catalan political activist Neus Catala; and the French ethnologist Germaine Tillion. The investigation on the activities of two prominent women's association Mujeres Libres and la Union de Mujeres Espanolas has not been fully carried out yet.

研究分野：現代史

キーワード：スペイン内戦 亡命 強制収容所

1. 研究開始当初の背景

これまで報告者はスペイン内戦下の女性について、女性組織の活動や、何名かの政治家、活動家たちに焦点を当てて研究をしてきた。今回の研究はその延長線上に位置するものである。

スペイン内戦については、様々な視点からの研究がされている。女性が内戦下で果たした役割や内戦下での日常生活等についても、研究書、回想録、インタビュー等などを通じてかなりの部分が明らかになってきた。内戦後、亡命をした女性たちについても、主として、スペイン語圏に亡命した知識人女性や家族と一緒に亡命した人たちについても研究の蓄積はされてきた。

近年になって始まった研究の一つとして、内戦後、亡命先のフランスで抵抗活動に参加したため、ナチの収容所に収容され、「ホロコースト」の犠牲者となったスペイン人についてである。スペイン人が多く収容されていたマウトハウゼン収容所については既にいくつかの精緻な研究がなされているが、今回の研究では、ナチドイツが設置した女性むけの強制収容所であるラーフェンスブリュックに収容されていたスペイン人女性について考察しようと考えた。

これと並行して、内戦中に活動をしたいくつかの女性組織についても、新たな資料の公開等もあり、活動の実態について研究が可能なのではないかと予想された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、スペイン内戦後に亡命を余儀なくされた 50 万人とも言われる人々のうち、フランスに亡命した女性たちの生き方を探ることにある。研究の柱としては、以下の 2 つの点にしぼる事にした。

まず、第一として、スペイン内戦中もしくは内戦後、フランスに亡命し、第二次世界大戦時の占領下フランスで、ナチドイツへの抵抗運動に直接的、間接的に拘ったために、強制収容所に収容されたスペイン女性たちについてである。すでに述べたように、スペイン人が多く収容されていたのは、マウトハウゼンであったが、女性専用の収容所であるラーフェンスブリュックに収容されていたスペイン女性たちもいた。強制収容所から生還した何人かの女性たちの回想録や研究書が出版されはじめ、そうした研究を糸口としながら、強制収容所でのスペイン人女性について追ってみたいと思っていた。

第二点目としては、スペイン内戦中に共和国陣営で活動をしていた二つの女性組織、アナキズムを標榜するムヘレス・リブレスと共産党指揮下にあったスペイン女性連盟の亡命先での活動について考察することである。

また、以上 2 点の大きな柱に加え、2007

年、社会労働党政権下で施行された「歴史の記憶法」制定後の歴史の記憶のあり方との関連で、こうした女性たちをどのように記憶していくのかという点についても考察を試みた。

3. 研究の方法

まず、研究目標の第一点目については、先行研究をふまえた上で、さらなる文献、資料調査を行った。強制収容所がどのようなものだったのか、どういった運営がなされ、そこでの生活はどうだったのか、人間関係はどのように形成されたのかについて研究をした。この点について考察するために、ラーベンスブリュックについての多くの研究書、回想録等を読解し、その実態の把握につとめた。ラーベンスブリュックばかりでなく、他の強制収容所についての研究書、ホロコーストについての研究なども参照した。

現在、収容所はどのような形で残され、記憶の場になっているのかを考察するために、いくつかの強制収容所跡を訪問した。ポーランドのアウシュヴィッツ＝ベルケナウ、ドイツのダッハウ、オーストリアのマウトハウゼン強制収容所跡などで、それぞれの場所で展示や映像資料などを調査した。

ホロコーストへの理解を深めるために、アメリカホロコースト博物館が主催した追悼イベントに参加し、博物館が中心に行っている情報収集、データベース作りなどについて、詳細な情報を得る事ができた。また、各地のユダヤ博物館がホロコーストをどのようにとらえているか、どのような展示をしているのかを参照するために、研究集会、資料収集等に行った機会を利用して、ミュンヘン、マンチェスター、アムステルダム、そしてニューヨークのユダヤ博物館も訪問した。ニューヨークではユダヤ人遺産博物館で開催されていた「ホモセクシュアルへのナチの迫害」という展示をみる事が出来、ナチがユダヤ人だけではなく、あらゆる異端分子を迫害の対象をしていて、それがいかに組織的に行われていたのかを知る事ができた。

亡命や抑圧を題材とした映画やドキュメンタリーなども多くみることができた。女性たちへのインタビューやスペインのテレビ局が制作したドキュメンタリー番組、フィクションではあるが、女性たちへの抑圧や、彼女たちの抵抗運動をあつかった映画、ホロコーストについてのドキュメンタリーなどをみた。スペイン人の強制収容所での体験を題材とした演劇「青い三角印」(青い三角印：これは収容所でスペイン人が着用させられたバッジである)については、タイミングがあわず、未見であるが、入手した脚本を読み解いた。

歴史の記憶の場もいくつか訪問した。2015年にバルセローナのセルバンテス公園内に設置されたラーフェンスブリュックの女性

たちに捧げられた記念碑、マドリードのアルムデーナ墓地にある Trece Rosas (13 名のバラ、内戦直後にフランコ体制により殺害された 13 名の女性たち) の記念碑などである。マウトハウゼン強制収容所跡では、グーセン収容所での死者も含めた 81000 名の名前が刻まれた「名前の部屋」や収容者の出身国別の記念碑を、ダッハウでは駅から強制収容所跡へと続く道沿いに設置された記念碑を見学した。

イギリス、スペインなどで開催されたシンポジウムや研究集会にも参加した。スペイン現代史学会大会やホロコーストや歴史の記憶に関するいくつかの研究集会に出席し、様々な視角からの研究動向に触れるとともに、研究者たちと意見交換をした。

4. 研究成果

まず、ラーフェンスブリュック強制収容所についての先行研究、元収容者の回想録などを参照しながら、収容環境がどのようなもので、それがいかに変化していったかを把握した。収容所の目的が、当初のナチにとっての社会的危険分子の「再教育」から、労働力供給源へと変化していたこともわかった。収容者数が増加するにあたって、収容状況も変化し、その上で、多くのスペイン人女性が収容されていた期間の収容所について考察した。

ラーフェンスブリュック強制収容所に収容されていたとされる約 400 名のスペイン人女性のうち、約 110 名について、収容者名簿、回想録、研究書などを参照しながら、収容者のリストの見直しを行った。すでに、ラーベンスブリュック抑留者協会の手によってリストは作製されていたが、情報をもう一度精査し、いくつか項目を追加し、加筆修正を加えた。ただし、残っている史料に制約があり、完璧なリストを作製するのは困難だと言わざるをえない。

ラーフェンスブリュックから生還したニュース・カタラーは、抵抗活動に参加した女性たちに、インタビューを行い、その結果を著作にまとめているが、彼女が実施したインタビューは音声史料としてバルセロナ市立文書間に保存されている。そのうちの一部を参照することができた。またカタラー氏へのインタビューや彼女に関する新聞記事、インタビューを元にした聞き書きなどを参照しながら、彼女の人生の足跡を追った。その成果は、氏と同じ時期にラーベンスブリュック収容所に収容されていたフランス人の人類学者であるティヨン氏との比較をしながら、論考にまとめた。当初はカタラー氏へのインタビューを予定していたが、面談したラーフェンスブリュック抑留者協会のテレサ・デル・オジョ氏からすでに高齢のため、記憶が正確でないこともあり、すすめられないとアドヴァイスを受け、断念した。

こうした元収容者たちが、現代のスペインでどのような受け止められ方をしているかについても多少の考察をした。現在、マウトハウゼン抑留者協会とラーフェンスブリュック抑留者協会が活動をし、機関誌発行、情報収集、収容所の訪問ツアー、記念式典開催などの活動を行ってきた。ただし、マウトハウゼン収容者協会の代表をつとめ、自らの収容体験についても語っていたエンリケ・マルコス氏が、実は収容所に収容された事実がなかったということが判明した。この件は歴史修正主義者たちからの批判の対象となった。また、ラーフェンスブリュック抑留者協会は資金不足から事務所の閉鎖を余儀なくされた。元抑留者の高齢化も進み、こうした組織の運営は難しくなっているとも言える。

しかし、「歴史の記憶法」の制定と、それに伴う過去の見直しから、肯定的な側面も現れた。バルセロナのセルバンテス公園には、2015 年 3 月、ラーフェンスブリュックの抑留者女性たちへの記念碑が設置された。関連書籍の出版も相次いでいる。

マウトハウゼンでは駅前に収容者を記念する碑が設置されている。ミュンヘン郊外のダッハウはアウシュヴィッツと並び、多くの人が訪問する強制収容所跡である。すでに述べたように、ダッハウ駅から収容所に続く道には所々に記念碑が建っている。両収容所とも、様々な国籍の収容者がいたが、現在では、それぞれの国別に収容者を記念する慰霊碑やメッセージが多くみられた。スペイン人収容者が多かったマウトハウゼンではスペインやカタルーニャの国旗が多く見受けられた。

インタビューや映像史料は多く残っている。ドキュメンタリーもあるし、オーディオアーカイブとして、文書館等に所収されているものもある。いくつか行われているプロジェクトのうち、興味深いと感じたのは、リーズで参加した研究集会で知った抵抗運動に参加した女性たちへのインタビューに英語字幕をつけて、動画で公開するというプロジェクトである。

近年、こうしたテーマを取り扱った演劇の上演も続いている。前述の「青い三角印」は 2014 年の初演以来、何度か再上演され、2015 年には演劇部門での国民文学賞を受賞している。ニュース・カタラー氏への聞き書きをもとにした小説「空の灰」(このタイトルは収容所の焼却炉の煙突からのぼる灰を表している)は 2016 年 7 月からの上演が決定している。

本研究では主として、フランスに亡命していた女性たちに焦点をあてたが、行き先によるその後の人生の違いを考察するために、他国に亡命した女性たちについても、先行研究を中心に考察した。亡命先による違いもさることながら、知識人女性、政治活動をしていた女性たちと家族についていった女性たちとは、その経験も大きく異なっていたことが指

摘されている。これはフランスに亡命した女性たちについても当てはまることであり、今後、さらなる考察を続けていく上での大きな示唆となった。フランコ没後の民主主義スペインに帰国した女性とそうでなかった女性をわけた要因については、それぞれの状況によって異なるので、一般化は難しいが、大まかに言うと、亡命先の社会での根付き度と相関関係があることがわかった。亡命先で家族や仕事を得て、新しい社会にとけ込む度合いが強ければ強いほど、スペインに帰国する率が低くなっていく。

研究当初の予定では、内戦中に共和国陣営で活動をしていた2つの女性組織、アナーキズムを標榜するムヘレス・リブレスと共産党の指揮下にあったスペイン女性連盟(UME)の亡命中の活動について分析を計画していた。ムヘレス・リブレスについては、機関誌や中心的人物の回想録だけでなく、数年前にアムステルダムの国際社会史研究所に所収され公開が始まったサラ・ベレンゲール・ギジェンの書簡等にもあたっているが、具体的な活動の実態の把握には至っていない。UMEについては網羅的な研究成果が発表されている。今現時点まででは思ったような成果が上がっていないのが現状である後の課題の一つとしたいと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

砂山充子,「ラーフェンスブリュック強制収容所のスペイン人女性亡命者」、『人文科学年報』、専修大学人文科学研究所、査読無、44号、2014年、pp.33-63、http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6409&item_no=1&page_id=13&block_id=52

砂山充子,「ジェルメーヌ・ティヨンとネウス・カタラー：20世紀を生きた二人の女性たち」、『専修大学人文科学研究所月報』、査読無、256号、2014年3月、pp.1-17、http://ir.acc.senshu-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6399&item_no=1&page_id=13&block_id=52

6. 研究組織

(1)研究代表者

砂山充子 (SUNAYAMA Mitsuko)

専修大学・経済学部・教授

研究者番号：00307125